

デンタルダイヤモンド／2013. 10月号

○実践歯科ライブラリー：The Micro Endoscopic Technique Akiyama Method (秋山勝彦)

*手術用顕微鏡を使用すれば、肉眼やルーペよりも質の高い治療が可能になるのは周知のことであるが、ミラーテクニックで行うよりも直視の方がさらに両手が使え質の高い治療が可能である。著者は可動域のさらに大きい手術用顕微鏡モラーシステムの出現に伴って、直視 70%、ミラーテクニック 30%のオリジナルテクニック「The Micro Endoscopic Technique Akiyama Method」を開発しその詳細について解説している。その方法とは、部位によって①患者の顔面を ②顎を高くする ③水平 ④下顎を高くする ⑤口唇などの障害物の牽引方向を変える ⑥術者のポジション 10 時～2 時に変化させる の3つを上手に利用してミラーテクニックを極力減らすものです。この先生のハンズオンコースにはカールツアイス社の歯科部門最高責任者のスラーベン氏も参加されたことから、マイクロスコープでの治療をお考えの先生には一読をお勧めします。

○RINSHO.COM：インプラント治療のリカバリーツール～低侵襲で撤去する～(柴原清隆)

*本特集では、各種リカバリーツールのうち、インプラント体及び上部構造を低侵襲に撤去する器具にフォーカスをあて、その概要を説明しています。フィクスチャーの撤去には「フィクスチャーリムーバー」(和田精密歯研)、システム不明のツーピースインプラントのアバットメントスクリューの撤去には「アバットメントスクリュードライバー」(和田精密歯研)、破折してフィクスチャーから容易に撤去できないアバットメントスクリューの撤去には「アバットメントスクリューリムーバーキット」(和田精密歯研)を紹介しています。また、上記の器具が使用できないフィクスチャーの場合にはピエゾサージェリーの使用についても説明しています。

歯界展望／2013. 10月号

○TCHのコントロールを日常臨床に取り入れる(東京都開業 齋藤博之・齋藤博・木野孔司)

*近年 TCH(Tooth Contacting Habit)という言葉をよく耳にするようになった。顎関節症患者の多くに、TCH(上下歯列接触癖)があることが明らかになってきたからである。TCHの是正が顎関節症治療だけでなく、他の口腔内の問題や、健康維持に有効だといわれ、また検証されてきた。上下の歯牙が接触した瞬間から咬筋や側頭筋などが収縮しこれが持続すると、口腔領域に影響が出るという。更に社会生活上の様々な要因(環境・生活・体調・気候の変化など)がストレスとなり症状を増悪させる事になる。本稿では TCH/TCH 発見のための検査やリスク分類からソンの対処法も書かれている。日常診療で一度お試しください。

ザ・クインテッセンス／2013. 10月号

○特集1. 20年経過300症例から歯の保存を考える

第1回：歯の保存状況、喪失原因、根尖性歯周炎の治療成績(千葉英史)

*今までの臨床を振り返って集めたデータを整理して、歯の保存に関してわかったことや気づいたことを3回にわたり紹介。20年以上診てきた患者 305 名を対象として、初回治療後に喪失したのは 214 歯(0.70 歯/人)。喪失した原因の多くは歯周病(118 歯)と歯根破折(83 歯)でう蝕(9 歯)、根尖性歯周炎(2 歯)は少なかった。抜髄も含めて歯内療法を行った歯数は 1,323 歯、そのうち根尖病巣を有した歯が 252 歯で改善率は約 90%であった。かかりつけ医がいることによって口腔がいかに守られているかの証でもある。

○特集3. オーバートリートメントへの警鐘

歯肉歯槽粘膜形成術から歯周形成外科手術への変遷を踏まえて(佐藤秀一 鴨井久博)

*歯周形成術の付着歯肉と歯肉退縮に対する処置について正しい考え方と治療法について解説。まとめとして、付着歯肉の欠如や歯肉退縮があっても、患者がプラークコントロールを良好に行うことができ、歯周病が進行していかなければ処置の必要はない。歯肉退縮は患者の審美的要求や処置技術の向上によって、完全な根面被覆が求められるようになってきているため、厳密な症例選択が必要となる。知っておくべき科学的根拠と治療例の紹介は大変参考になる。

日本歯科評論／2013. 10月号

○＜特集＞ 長期症例に学ぶ——信頼の歯科医療のために (河津 寛 長谷川雄一 他)

*長期に患者さんと付き合っていくという事は、患者さんと信頼関係を築かなければありえません。そして全力で治療したのに予期せぬことが起こり、対処しなければならぬことも多々あります。そういった長期症例を提示し、どのようなことが起こりどのように対処したか等詳しく解説しています。歯科医師になってまだ日が浅い若手の歯科医師にとっては非常に参考になる特集だと思います。また、ベテランの歯科医師にとっても自分の長期症例と比較しながら読み進めると大変興味深いものになると確信しています。

○口腔がん——歯科医院における早期発見のアプローチ

(千葉光行・下野正基・山根源之・田中陽一他)

*口腔がんは我々歯科医師がみつかることのできる数少ないがんの一つです。しかしがんとしては多くはなく、その病態はさまざまに初期に発見できなかったため命を救えなかった事例も多いといえます。口腔がんを初期の間に見逃さないしっかりした目を持つことは歯科医師として責務です。是非お読みになることをお勧めします。